

「もの」「こと」を含む複合辞の広がり

On the variety of functional words including “mono” and “koto”

高橋 雄一

TAKAHASHI Yuichi

要旨 本稿は、筆者のこれまでの研究に基づき、現代日本語に見られる、〈当為〉を表す「ものだ」「ことだ」のような複合辞と、そのもととなっている名詞「もの」「こと」の諸用法との繋がりを見るものである。特に、名詞「もの」「こと」が本来の名詞の用法から外れ、文法的な側面を強く持つ用法を、具体的な用例と共に見ていく。

キーワード：複合辞 形式語 形式名詞 連体修飾 文法化

目次

1. はじめに
2. 形式語「もの」「こと」と連体節の構造について
3. 「もの」「こと」の中間的な用法についての調査
4. おわりに

1. はじめに

現代日本語には、〈一般化〉や〈当為〉を表す「ものだ」「ことだ」や、〈反語〉や〈感心・あきれ〉を表す「ものか」「ことか」のような、「もの」「こと」を含む複合辞がある。一方、名詞「もの」「こと」についても、本来の名詞の用法から外れ、文法的な側面を強く持つ用法もあり、複合辞に近いものとして位置づけられる。本稿では、まず、筆者が「もの」「こと」を含む複合辞をどのように捉えているかを示した上で、名詞「もの」「こと」の諸用法のうち、複合辞に近い中間的な用法を、具体的な用例と共に見ていく。

2. 形式語「もの」「こと」と連体節の構造について

ここではまず、筆者のこれまでの研究を概観することにより、名詞「もの」「こと」と、それらを含む複合辞との関係を示す。

2.1 形式語としての「もの」と「こと」について

筆者は高橋(2018)において、この論文が収録されている藤田・山崎(編)(2018)が下記のような捉え方で「形式語」をテーマにしていることから、「ものだ」「ことだ」のような複合辞だけでなく、複合していない「もの」「こと」の文法的な側面の強い用法にも改めて注目した。本稿でもこれらを体系的に把握する視点から論じる。

- 1) 近現代日本語においては、「複合辞」すなわち複合して辞に転成した形式のみならず、単独で辞的に働く形式に転成したのも数多く見られ、それらの研究も「複合辞」の研究と同様に深められる必要がある。そうした問題意識から、「複合辞」と単独で辞的形式に転成したものとを併せて「形式語」と呼ぶこととし(以下略)(藤田・山崎(編)2018:i)

なお、上記のように広い範囲をカバーする「形式語」も、より狭く「もの」「こと」が該当する「形式名詞」も、明確な定義をすることは難しいとされている。

2.2 名詞の「もの」「こと」の連体修飾について

まず、名詞「もの」「こと」の連体修飾のタイプについてまとめておく。連体修飾構造の分け方については、ここでは筆者による「関係節の構造」「内容節の構造」を示す。¹⁾

【関係節の構造】

- 2)a これは昨日買ったものです。(私が昨日(その)ものを買った)
- b 私が知っていることをお話します。(私が(その)ことを知っている)

【内容節の構造】

- 3)a 私が海外で日本語を教えていたことをお話します。
- b *私が海外で日本語を教えていたものをお話します。

名詞「もの」は連体修飾部の述語と被修飾名詞の間に格関係がある「関係節の構造」のみが可能であり、3)bのように連体修飾部が被修飾名詞の「内容」を表す「内容節の構造」を作ることにはできない。一方、名詞「こと」は「関係節の構造」「内容節の構造」の両方を作ることができる。

この違いは、名詞の意味的なタイプによるもので、かなり明確なものと思われるが、「もの」については、「～ものだ」のように名詞述語文として使われている場合に例外的な用法があることが指摘されている。

- 4) 彼の性格は、誰の意見にも耳をかさないというものであった。(揚妻 1991: 3)
- 5) その山腹を、高速道路(圏央道)の2本のトンネルが貫こうとしている。訴訟は、道

路工事の差し止めを求めるものだ。（朝日新聞）

4)、5)の「もの」は名詞としての用法ではあるが、それぞれ連体修飾部が「もの」の内容を表し、内容節の構造をとっていると言える。こういった用法は、名詞「もの」＋「だ」の用法と、複合辞「ものだ」の用法の中間的なものと考えられる。

2.3 「もの」「こと」を含む複合辞について

次に、筆者のこれまでの研究をもとに、「もの」「こと」が他の文法的要素と一体化して複合辞となっていると認められるものを示す。ここでは、「もの」を含む複合辞と「こと」を含む複合辞を対比させるために、対応関係を表にして示す。なお、この表は網羅的なものではないことを断っておく。

表1 「もの」「こと」を含む複合辞の対応関係の例

番号	意味または形式による対応関係	「もの」を含む複合辞	「こと」を含む複合辞
1	Nダ〈当為〉	・学生は勉強する <u>ものだ</u> 。	・試験に合格したければ、勉強する <u>ことだ</u> 。
2	Nダ〈当為〉の否定	・人の悪口は言わない <u>ものだ</u> 。 ・そんなわがままを言う <u>ものではない</u> 。	・必要以上に心配しない <u>ことだ</u> 。 ・行きたくなければ無理に行く <u>ことはない</u> 。
3	Nダ〈回想〉	・子供の頃はよくこの公園で遊んだ <u>ものだ</u> 。	———
4	Nダ〈願望〉	・いつか私もそこへ行って <u>みたいものだ</u> 。	———
5	Nダ〈感心・あきれ〉	・あの人には困った <u>ものだ</u> 。	・飽きもしないでよくやる <u>ことだ</u> 。
6	評価成分を作る用法	・不思議な <u>もので</u> 、忙しい時に限って友人から連絡がある。	・驚いた <u>ことに</u> 、友人も偶然そこへ来ていた。
7	Nカ	・絶対に負ける <u>ものか</u> 。	・その話を聞いて、私は <u>どんなに驚いたことか</u> 。
8	Nガアル	———	・ときどき一人旅をする <u>ことがある</u> 。 ・一人旅をした <u>ことがある</u> 。
9	Nガデキル	———	・アラビア語を話す <u>ことができる</u> 。

表1で番号を付けた各項目ごとに筆者の捉え方を述べる。

1の〈当為〉の用法は、複合辞の「ものだ」「ことだ」に共通している。同じように名詞を含む複合辞である「ところだ」「わけだ」「はずだ」等には〈当為〉の用法がないことから、何らかの違いがあると考えられる。筆者は、連体修飾構造の違いに注目し、「ところだ」「わけだ」「はずだ」は「(連体形式の)副詞節の構造」のタイプの連体修飾構造がもとにあることが、〈当為〉の用法が生じない要因になっていると考える。

〈当為〉の「ものだ」と「ことだ」の違いについては、意味の面と形式の面がある。意味の面の違いとしては、「ものだ」は〈一般化〉の用法が〈当為〉の用法に結びつくのに対し、「ことだ」は〈指定〉の用法が〈当為〉の用法に結びつくという違いがある。形式の面では、2の〈当為〉の否定において、「ものだ」は「ものだ-ものではない」という肯否の対立があるのに対し、「ことだ」はこの対立がなく、否定には〈不必要〉を表す「ことはない」が該当するという違いがある。さらに、3、4のように「ものだ」には前接する形式に応じた用法があるが、「ことだ」にはない。

5の〈感心・あきれ〉の用法は「ものだ」「ことだ」の両方にあるが、筆者の調査(ただし厳密なものではない)では「ものだ」の方が用例数が多かった。一方で、意味的に〈感心・あきれ〉に近いと考えられる6の「評価成分を作る用法」の「もので」「ことに」では、「ことに」の方が用例数が多かった。つまり、複合辞としてはそれぞれあるものの、〈感心・あきれ〉は「ものだ」、「評価成分を作る用法」は「ことに」が主に使われるということが推測できる。

6の「評価成分を作る用法」の「もので」と「ことに」は、「で」と「に」の形式の違いがあることも特徴的と言えるであろう。7の「ものか」と「ことか」は「ものか」が〈反語〉等、「ことか」は疑問詞を伴って〈感心・あきれ〉を表すという違いがある。また、8、9のように、「こと」には「Nガ〜」系列の複合辞がある。

以上のように見ると、「もの」を含む複合辞には「ものだ」の助動詞的な一連の活用を見出すことができるのに対し、「こと」を含む複合辞は、「こと」の独立性が強く、そこに「だ」「がある」等が付く関係と考えられる。

3. 「もの」「こと」の中間的な用法についての調査

2で見た「もの」「こと」を含む複合辞と、名詞「もの」「こと」の間には、複合辞とは認められないが、名詞「もの」「こと」が元の用法から外れ、文法的な側面をより強く持っている中間的な用法が見られる。ここでは特に、話し手の認識を表す文末表現に「もの」「こと」が前接する用法を取り上げ、コーパスからの用例によって実際の使われ方を見ることにする。

3.1 コーパスによる用例収集について

ここで示す用例は、国立国語研究所の「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ) から採集したものである。採集にはコーパス検索アプリケーション「中納言」を使用し、短単位検索で語彙素を「もの」「モノ」「物」「者」 / 「こと」「コト」「事」としてそれぞれ検索した。検索対象は、13個全てのレジスターとしたが、コア・非コアがある場合はコアのみを対象とした。また、それぞれの語彙素について1つのレジスターからは1万例を上限とし、それ以上用例がある場合は、全体から均等に1万例までを取る処理をした。²⁾ 用例数やタイプごとの割合などの量的な情報については、十分に集計できていないため本稿では省略し、議論に沿って適宜用例を示す。

本稿で用例を示す際は、用例の後に(コーパス名(本稿では全て BCCWJ)、レジスター名、書名/出典(データがある場合のみ))を示す。

3.2 話し手の認識を表す文末表現に前接する「もの」「こと」

「もの」「こと」には、「～ものと思われる」「～ことだろう」のように、話し手の認識のし方を表わす文末表現に前接する用法がある。このうち「もの」については、揚妻(1990)がこの種の「ものだろう」「ものと思われる」を〈解説〉の「ものだ」の一種とし、先行状況を主題にとる〈状況解説〉と、そのような関係の弛緩が進んで、主題としての先文脈がない〈状況推定〉とに分けている。

さらに安達(1998)は、このような「もの」と「こと」の用法を対比させ、「もの」については「その事態がそのように判断するだけの根拠があるものとして捉えられるとき」に「もの」として把握されるとし、「こと」については「話し手がその事態の真偽が不確定的であると認識している」場合に「こと」として把握されるとしている。下に安達(1998)から用例を引用する。

- 6) たとえば、集団で生活していれば、仲間の個体がエサを見つけて食べている姿を見るだけでも、どこにエサがあるかがわかる。このことだけでも、群に加わる十分な理由になるものと思われる。(安達 1998(13)) (句読点や下線の表記を本稿に合わせた。次の例も同様)
- 7) 安易に他の人の作った〈研究史〉に乗るとろくなことはない。研究者が同じ問題について違ったアプローチを試みるときには、新たな〈研究史〉が生まれることだろう。(安達 1998(19))

筆者の立場からは、この種の「もの」「こと」はそれぞれ複合辞の「ものだ」「ことだ」等と共通する特徴を持っていると考える。「もの」は、関係節の構造の延長として、属性の主体としての特徴を持っているため、事態のあり方が制限されるために、認識のし方を表わす文末表現に〈確定性〉を付け加える要素となりうると考える。一方、「こと」は、内容節の構造

の延長として、事態をひとまとめに捉えるという特徴があるため、話し手にとってその事態が発話の現場から切り離されたものとして表現されると考える。

以上のような議論を踏まえ、次から実際の用例を見ていく。用例については、まず、この用法に当たると判断する条件が問題になる。これは基本的に、「もの」「こと」に対応する主題がない構造であると見なされるものが該当すると考えた。また、「もの」「こと」が独立していて、「ものと思われる」「ことだろう」などが複合辞とは認められないという点も重要である。これについては、「もの」「こと」を取り除いても似た意味で文が成り立つか否かに注目した。さらにその上で、そのような「もの」「こと」自体にどのような意味・機能があるかについても考えた。

3.3 「もの／ことと 思う等」

まず、「ものと思う」「ことと思う」のように、「もの」「こと」が思考や認識を表す動詞と共に使われる場合について見る。

初めに「思う」の場合を見る。なお、ここでは「思う」を代表形式として示し、用例には「と思われる」等を含むこととする。この後に挙げる他の動詞についても同様である。下の8)、9)が「もの」、10)、11)が「こと」の用例である。「思う」については、このように「もの」「こと」の用例が両方とも見られた。それぞれ2例目の9)と11)には副詞「きっと」が使われているが、「きっと～ものと思う」「きっと～ことと思う」のどちらも自然な表現と言えるであろう。

- 8) M B A卒業生が対象とする外資系企業、米国を含めるグローバル企業の多くは、欧州ビジネススクールの質の高さを認識しており、あくまで本人の実力と人間性次第だが、欧州のM B A卒業生は高く評価されているし、今後もその傾向は高まっていくものと思われる。(BCCWJ, 出版・雑誌, 週刊東洋経済)
- 9) 志ん朝師の本が出るのはこれ一冊のみなのできっと皆様に喜んで頂けるものと思う。(BCCWJ, 出版・雑誌, 小説現代)
- 10) 帰らない娘を待って、六十過ぎの志はただ一人、東京の仮住いで不安な日夜を送ったことと思われる。(BCCWJ, 図書館・書籍, 昭和史のおんな)
- 11) 娘の書く詩を通して、また子どもたちの書く詩を通して、子どもの心を取り戻すことのできた小久保さんは、きっとこれからも子どもといい関係をつくっていくことと思います。(BCCWJ, 出版・書籍, 話を聞いてよ、お父さん！比べないでね、お母さん！)

これらの用例は、下のように「もの」「こと」を削除しても文は成り立つ。「もの」「こと」がある場合と対比させて、「もの」「こと」がそれぞれ何を表しているかを考えてみよう。

- 8') M B A卒業生が対象とする外資系企業、米国を含めるグローバル企業の多くは、

欧州ビジネススクールの質の高さを認識しており、あくまで本人の実力と人間性次第だが、欧州のMBA卒業生は高く評価されているし、今後もその傾向は高まっていくと思われる。

9) 志ん朝師の本が出るのはこれ一冊のみなのできっと皆様に喜こんで頂けると思う。

10) 帰らない娘を待って、六十過ぎのき志はただ一人、東京の仮住いで不安な日夜を送ったと思われる。

11) 娘の書く詩を通して、また子どもたちの書く詩を通して、子どもの心を取り戻すことのできた小久保さんは、きっとこれからも子どもといい関係をつくっていくと思います。

それぞれの用例の内容からは、「もの」が使われている場合は、「思う」内容について話し手の確信がある場合であると考えられる。一方、「こと」が使われている場合は、「思う」内容が確実ではなく、それを推測している場合であると考えられる。これは、安達(1998)が、「もの」が何らかの根拠があると話し手が捉えている場合に使用され、「こと」が話し手がその事態の真偽が不確定と捉えているとしていることとも一致する。ただし、「もの」「こと」を削除しても同じような意味で文が成り立ってしまうことから、このような「もの」「こと」自体がはっきりとした文法的な意味・機能を持って、それを文に付け加えているというよりは、それぞれの意味をよりはっきりと表すという程度の役割を果たしているのではないかと考えられる。

次に、「と考える」「と見る」について見る。これらは今回、「もの」しか用例が見つからなかった。安達(1998)も「ことと考える」「ことと見る」の用例は挙げていない。

12) モルディブ全土では死者・行方不明者合わせて百八名に達したことと比較すると、マレ島においては、我が国が整備した護岸等が津波被害の軽減に大きく役立ったものと考えられます。(BCCWJ, 白書, 我が国の政府開発援助)

13) 農村部を含む全国レベルでも普及率が高まりつつある洗濯機、扇風機、冷蔵庫、カラーテレビといった白物家電については、今後、日系企業のほか、地場企業でもこのような差別化の取組が進展するものと考えられる。(BCCWJ, 白書, ものづくり白書)

14) 最近では、全体として治安の改善が認められるが、依然地方を中心にテロ事件は断続的に続いており、テロの完全な根絶までには時間を要するものと見られる。(BCCWJ, 白書, 国土交通白書)

15) 後任にはすでに何名かの名前が上がっており、センシ会長が方向性を決めるものと見られている。(BCCWJ, 出版・雑誌, 週刊サッカーダイジェスト)

下に「もの」を「こと」に置き換えた作例を示す。確かに「こと」を使用すると、非文法的というほどではないが、文法的に違和感を感じる。これは「と考える」「と見る」の方が「と思う」より話し手の確信を強く表すためではないかと考えられる。

- 16) a. ?マレ島においては、我が国が整備した護岸等が津波被害の軽減に大きく役立つことと考えられる。(作例)
b. ??テロの完全な根絶までには時間を要することと見られる。(作例)

なお、レジスター「特定目的・法律」には他と比べて特殊な用例が見られた。「もの」については、次のように「ものと解してはならない」「ものと認める」「ものと推定する」といった表現が見られ、他のレジスターにある場合も、法律に関する文章であった。これらは法律の条文に特有の用法と考えられる。

- 17) 3 第一項の規定による立入検査の権限は、犯罪捜査のために認められたものと解してはならない。(BCCWJ, 特定目的・法律, 独立行政法人住宅金融支援機構法)
18) 第十六条 国土交通大臣は、前二条の検査の結果、当該国際航海日本船舶が次の各号に掲げる場合に該当すると認めるときは、それぞれ当該各号に定める措置が講じられたものと認めるまでの間、当該船舶保安証書の効力を停止するものとする。
(BCCWJ, 特定目的・法律, 国際航海船舶及び国際港湾施設の保安の確保等に関する法律)

- 19) 5 委員会の決議に参加した委員であって第三項の議事録に異議をとどめないものは、その決議に賛成したものと推定する。(BCCWJ, 特定目的・法律, 会社法)
「こと」についても同様に、「こととみなす」の独特な用法があった。日常的な用法としては「ものとみなす」であろうと考えられる。

- 20) 規定により機構の職員となった者に対する国家公務員法(昭和二十二年法律第二百十号)第八十二条第二項の規定の適用については、機構の職員を同項に規定する特別職国家公務員等と、前条の規定により国家公務員としての身分を失ったことを任命権者の要請に応じ同項に規定する特別職国家公務員等となるため退職したこととみなす。(BCCWJ, 特定目的・法律, 独立行政法人労働政策研究・研修機構法)

3.4 「もの／ことだろう」

次に、「もの」「こと」が「だろう」と共に使われる場合について見る。21)22)が「もの」の例、23)24)が「こと」の例である。ここでも3.3と同様に、「だろう」で「であろう」や「でしょう」といったヴァリエーションを代表させる。

- 21) あなたの子どもが生まれたら、予防接種をどのように受けさせるか判断を迫られる。
予防接種の知識を、本を読むだけで身につけるのはなかなか難しい。実際にワクチ

ンを手にとってみたり、接種するところを見たりしているうちに実感がわいてきて、知識が定着していくものだろう。(BCCWJ, 出版・書籍, 小児プライマリ・ケア虎の巻)

- 22) 角海老の大時計は、一しきり大火焰を中空にあげていたが、ごうごうの音とともにくずれおちていく。葎の他に志賀直哉もかけつけて、そのようすを眺めていた。ラジオさえない時代だが、直哉は号外を見てかけつけたものだろう。(BCCWJ, 図書館・書籍, 今は幻吉原のものがたり)
- 23) 山田監督もすっかり乗り気。来年早々には、再び太秦で時代劇第二作に取り組みます。たくさんの要求があることでしょう。私たち京都の技術陣も、また、心してあつと言わせるアイデアで受けてたちましよう。楽しみです。(BCCWJ, 新聞, 京都新聞)
- 24) 古井は、青年団の団長で、台風が来るたびに、真っ先に川へと車を走らせる。上流のダムの事務所から、いち早く増水時の放水情報を受けられるようにと無線の免許を取ったのも古井が最初だ。今日の彼は電卓の代わりに一日中無線機を持ち歩き、ラジオをつけ放しにしていることだろう。(BCCWJ, 出版・書籍, 風変りな魚たちへの挽歌)

これらの用例の「もの」「こと」を削除した場合、どうなるかを見てみよう。「もの」の場合、ル形に接続する 21) は「もの」を削除しても文が成り立つが、タ形に接続する 22) は a のように「もの」がないと、反実仮想のような表現になり、文脈に合わなくなってしまう。b のように「の(だ)」を補えば「もの」と近い意味になると考えられる。

21) あなたの子どもが生まれたら、予防接種をどのように受けさせるか判断を迫られる。予防接種の知識を、本を読むだけで身につけるのはなかなか難しい。実際にワクチンを手にとってみたり、接種するところを見たりしているうちに実感がわいてきて、知識が定着していくだろう。

22) a) *角海老の大時計は、一しきり大火焰を中空にあげていたが、ごうごうの音とともにくずれおちていく。葎の他に志賀直哉もかけつけて、そのようすを眺めていた。ラジオさえない時代だが、直哉は号外を見てかけつけたであらう。

b) …直哉は号外を見てかけつけたのであらう。

タ形に「ものだろう」が接続する場合に「もの」を削除すると意味が変わってしまう点については、「だろう」の特徴と言えそうである。先に見た「と思う」なら、「…かけつけたものと思われる」と「…かけつけたと思われる」で意味が変わらない。

また、「ものだろう」と「のだろう」の類似については、揚妻(1990)が次のような例を挙げ、「ものだろう」はあくまで先行状況がどうであるかを解説するものであるので、「のだろう」

のように先行状況を基にしてそこから自由に主体的判断を行うことはできないという違いを述べているが、上で見た置き換えのように両者が重なる場合もあるとすることができるであろう。

25) a. どんより曇ってきた。雨でも降るのだらう。(揚妻 1990:(27a)) (記号や下線の表記を本稿に合わせた。次の例も同様)

b. ?どんより曇ってきた。雨でも降るものだらう。(揚妻 1990:(27b))

一方、「こと」の場合は、下のように削除をしてもあまり意味が変わらずに文が成り立つようである。このことから、このような推量を表す「だらう」と、「ことだらう」があまり変わらない表現であると考えられる。

23) 山田監督もすっかり乗り気。来年早々には、再び太秦で時代劇第二作に取り組みれます。たくさんの要求があるでしょう。私たち京都の技術陣も、また、心してあっと言わせるアイデアで受けてたちましよう。楽しみです。

24) 古井は、青年団の団長で、台風が来るたびに、真っ先に川へと車を走らせる。上流のダムの事務所から、いち早く増水時の放水情報を受けられるようにと無線の免許を取ったのも古井が最初だ。今日の彼は電卓の代わりに一日中無線機を持ち歩き、ラジオをつけ放しにしているだらう。

ここでも「こと」の存在は、必須というほどではないのであろう。「ことだらう」という表現を、事態の不確かさを表す表現とその事態に対する推量の表現の組み合わせと考えると、事態の不確かさが明確に表されなくても推量は成り立つというように考えられる。

また、「ことだらう」については、次のように程度を推測する「さぞ(や)」「何度」という表現と共に使われるという特徴がある。

26) モーニングを着た紳士らしき二人の若者が将棋を指しながら旅行しているという風景は、他の乗客にはさぞや異様に映ったことでしょう。(BCCWJ, 新聞, 高知新聞)

27) 最近は寝てばかりだった。脳みそが死んでいくと、何度苦笑したことだらう。

(BCCWJ, 出版・書籍, 夏は、夜)

「ものだらう」の場合は、このような表現は見られない。ただし、次のように「ものだらうか」であれば可能である。

28) 怒りを感じなければ、どんなに幸せな日々を送れるものだらうか、と思う一方で、「怒り」はエネルギーの素のような感じもする。(BCCWJ, 図書館・書籍, 「NO!」を言うことから始めよう)

「ものだらうか」は程度を推測する表現がない場合もあるが、「ことだらうか」は、程度を推測する表現を必ず取るようである。安達(1998:214)は「「こと」の介在がおこるのは疑問詞(不定詞)によって形成される補充疑問のタイプに限定される」としている。また、指摘のみで

あるが、「ことか」の同様の表現との類似を指摘している。筆者の用例で類似関係を見てみよう。

29) 清一とミツは、この思いがけない出来事をどれほど嘆き悲しんだことだろうか。

(BCCWJ, 図書館・書籍, 音のない記憶)

30) 泊瀬とは「果つ瀬」で初瀬川に山々が迫っているという意味だという。歩くしか手段がなかった頃、ここはどれほど深い山の中だったことだろうか。(BCCWJ, 出版・雑誌, 旅の手帖)

29´) 清一とミツは、この思いがけない出来事をどれほど嘆き悲しんだことか。

30´) …ここはどれほど深い山の中だったことか。

筆者は、「ものか」「ことか」を論じた高橋(2014)で、このような「ことか」の程度のはなはだしさを述べる用法を〈感心・あきれ〉の用法とし、「ことだ」の〈感心・あきれ〉の用法との類似について述べた。例えば次のような例である。

31) その話を聞いて、どんなにあきれたことか。(高橋 2014:69)

32) そんな話をするなんて、あきれたことだ。(高橋 2014:70)

29´) 30´) の例ではこのような対応関係は作れないようであるが、「ことか」「ことだ」の〈感心・あきれ〉の用法と、さらにここで見た「ことだろう」「ことだろうか」の用法は共通性があると見ることができる。

一方、「もの」については、〈感心・あきれ〉の用法は「ものだ」にしかなく、「ものか」には〈反語〉(例: 負けるものか)、〈願望〉(例: だれかに協力してもらえないものか)、〈適当〉(例: 私がしてもいいものか)がある。このうち、〈願望〉には下記のように「ものだろうか」の用法がある。グループ・ジャマシイ(1998)では、「ものか」の項目に「2 V-ないものだろうか」があり、「あるできごとの実現を望む話し手の気持ちを表す。」とされている。

33) だれかに協力してもらえないものだろうか。(グループ・ジャマシイ 1998:593(4))

34) A: 彼と話しができないものでしょうか。

B: 何とか方法を考えましょう。(グループ・ジャマシイ 1998:593(6))

以上のことから、ここでも「もの」と「こと」の違いが考えられる。「ことだろう」に程度を推測する表現が多く共起することからは、「こと」が表す事態の不確定性が、安達(1998)の言う真偽の不確定のみでなく、事態の程度の不確定にも及ぶものであると考えることができる。一方、「もの」については、ここでも、事態の確定性を表すと考えることができる。

4. おわりに

本稿では、筆者の研究に基づいた「もの」「こと」を含む複合辞についての捉え方を示した後、それらと名詞「もの」「こと」との中間的な用法として、話し手の認識を表す文末表現に

「もの」「こと」が前接する用法を取り上げ、先行研究を参照しながら、具体的な用例に基づいて「もの」「こと」それぞれの特徴を見た。ここで見たそれぞれの特徴が、名詞としての特徴と、複合辞としての特徴の双方と繋がるものとして把握できたと考える。

注

- 1) 筆者は連体修飾構造を「関係節の構造」「内容節の構造」「(連体形式の)副詞節の構造」の3タイプに分ける立場をとる。なお、連体修飾構造の分類については、全体を2分割する寺村(1975-78)、奥津(1974)による分け方が広く知られている。ここで名詞「もの」は一方のみ、「こと」は両方が可能というのは、この2分割する場合においても同様に成り立つ。
- 2) このコーパスからの用例収集は、本稿に示す研究助成による専修大学大学院生の作業によるものである。

参考文献

- 揚妻裕樹(1990)「形式的用法の「もの」の構文と意味—<解説>の「ものだ」の場合」『国語学研究』30、東北大学文学部国語学研究刊行会:82-94
- (1991)「実質名詞「もの」と形式的用法との意味的つながり」『東北大学文学部日本語科論集』I、東北大学文学部日本語学科:2-12
- 奥津敬一郎(1974)『生成日本文法論—名詞句の構造—』大修館書店
- グループ・ジャマシイ(編著)(1998)『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 高橋雄一(2014)「複合辞の「ものか」と「ことか」について」『専修国文』95号、専修大学:1-29
- (2018)「複合辞の「ものだ」と「ことだ」について—形式語としての「もの」「こと」の観点から—」, 藤田・山崎(編)(2018):279-297
- 寺村秀夫(1975,77a,77b,1978)「連体修飾のシンタクスと意味—その1~4—」寺村秀夫(1992)『寺村秀夫論文集I』くろしお出版:157-320
- 藤田保幸・山崎誠(編)(2018)『形式語研究の現在』和泉書院

本稿は、令和元年度 専修大学研究助成・個別研究「日本語の複合辞等の機能語についての基礎的研究」の研究成果の一部である。